

# 未来に向けて もっとも大切なこと MESSAGE



高嶋哲夫

TAKASHIMA Tetsuo

## プロフィール

1949年、岡山県玉野市生まれ。  
1969年、玉野高校を卒業し、慶應義塾大学工学部に入学。  
1973年、同大学院修士課程へ。在学中、通産省(当時)の電子技術総合研究所で核融合研究を行う。  
1975年、同大学院修了。日本原子力研究所(現・日本原子力研究開発機構)研究員。  
1977年、UCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)へ留学。現地ではアメリカの日本人子弟のための日本語補習学校(あさひ学園)で教壇にも立つ。  
1979年、「Drive characteristics of a fast movable limiter in the JT-60 tokamak」で日本原子力学会技術賞受賞。論文は米学術誌「Scientific Instruments」vol.49に掲載。  
1981年、帰国して学習塾を経営、教育産業に携わる。  
1990年、「帰国」で第24回北日本文学賞受賞。  
1994年、「メルトダウン」で第1回小説現代推理新人賞を受賞。  
1999年、「イントゥルーダー」で第16回サントリーミステリー大賞・読者賞をダブル受賞(作品は同年テレビドラマ化)。  
2006年、財団法人井植記念会(三洋電機創業者・井植歳男氏によるもの)より井植文化賞を受賞。  
2007年、「ミッドナイトイーグル」が映画化。松竹映画、米ユニバーサルピクチャーズの初の日米共同制作で、日米同時公開。  
2010年、「風をつかまえて」が第56回青少年読書感想文全国コンクール課題図書(高等学校の部)に選定。  
2011年、神戸市より、神戸市文化賞(芸術・文学)を受賞。  
日本推理作家協会、日本文芸家協会、日本文芸家クラブ会員、全国学習塾協同組合理事。原子力研究開発機構では外部広報委員長を務める。

2011年3月11日。

スポーツジムから帰ってテレビをつけた僕の目はくき付けたになった。

「— 水平線いっばいに広がる巨大な泡立つ白壁が、海上を滑ってくるのがくっきりと見えた。その水の壁は、砂浜に数十艘並んだボートを一瞬のうちに飲み込み、砂を巻き込みながら走ってくる—」。

これは僕の小説「TSUNAMI」の一場面だ。小説で描いた災害が、目の前で起こっていたのだ。

放送局を変えても同じだった。画面の中の惨事が、リアルタイムで日本の東北で現実起こっていたのだ。

翌日のテレビでは、延々と続く瓦礫を映し出していた。そこはかつて人がいて家が建ち、普通の生活があった町だ。しかしその痕跡は何も残っていない。津波は人を呑み込み、町を破壊し、過去と現在と未来を流し去っていった。

1995年1月。

僕は瓦礫の中を東に向かって車を走らせていた。

友人の安否を確かめるため、国道2号線を迂回しながら神戸市灘区に向かったときの光景は忘れられない。崩れた家と焼けた町が続き、その瓦礫の中に人々が立ち尽くしていた。阪神・淡路大震災だ。

身一つで高台に逃れ、眼前で自分たちの家が、町が流されていく様子をなすすべもなく見ている人たち。波が引いた後の瓦礫の中に行方不明の肉親や、思い出の品を探す人たち。

被害の様相に違いはあるが、被災地に立ち尽くす人々や避難所に暮らす人々の表情は16年前と同じだった。

阪神・淡路大震災から17年、東日本大震災からは約1年がすぎた。

神戸は表面上は震災のあとなど感じさせない町になった。しかし、まだ孤独死や二重ローン、企業倒産、なにより家族を亡くした人たちの苦しみは続いている。

2011年9月、僕は気仙沼に行った。

すでに、一帯を覆い隠していた瓦礫は撤去され、多くの道は通れる状態にはなっていた。しかし、港など海に面した地域は地盤沈下が激しく、海水に浸かっている道路がいくつもあった。

陸に打ち上げられた巨船、うず高く積まれた瓦礫や潰れた車。復旧が進んでいるとはとても思えなかった。人の姿はなく、瓦礫を処分している人がちらほらいるだけだ。

人が行き交い、家が建ち並んでいたかつての町は草が覆いつくし、町であった名残を見つけることさえ難しい。僕はその荒れ野に立ち、思いは複雑だった。

「町一つが消えてしまった」という運転手の言葉が胸に刺さった。

だが政府は、今も消費税増税と原発で右往左往しているばかりだ。

被災地以外の人たちの間では、地震、津波はすでに過去のモノとなったような感じさえする。

神戸の震災のときには、半年後、町は人で溢れていた。

阪神・淡路大震災後、政府や行政は多くの教訓を得、経験を持ち、法的整備もなされてきた。しかし、それらが今回の震災で十分に活かされたとは言い難い。

都市型災害と広域災害、様相は違っても、災害に対応する基本的なことは同じだ。迅速に公平に、をベースにすることが神戸で得られた価値ある教訓だ。「仮設住宅」「瓦礫問題」「二重ローン」「企業倒産」など、神戸のときに議論され、その後も反省を兼ねて討議されている。

そして今後、「震災遺児」「孤独死」「災害復興住宅」などの問題が起こってくることも分かっている。政府、行政の手厚い対応を望むばかりである。

地球の地下には巨大な岩盤、プレートがいく層にも重なり、ゆっくりと動いている。蓄積された歪エネルギーは、現在も確実に増えつつあり、限界に達したとき一気に解放される。それが地震だ。

ちなみに、今後三十年以内の東海地震の発生確率は87%。南海地震60~70%。南海地震60%。ただし、この三つは連動して起こる場合がある。また、東京大学地震研究所のチームが、東日本大震災後、首都圏の地震活動が活発になり、マグニチュード7クラスの首都直下地震が、今後4年以内に約70%の確率で発生するという試算をまとめたことが報じられた。

この国に住み続ける限り、巨大地震は必ずくる。

過去の経験を最大限に生かし被害を最小にすることこそ、被災された方が願い、亡くなられた方に報いることだろう。

神戸市内俯瞰  
【写真:村山千晶】